

## 私の読後感想(1)

永井 秀尚 著

「身を尽くしてや恋ひ渡るべき 小説小倉百人一首余聞」(文芸社刊)

平氏滅亡から三年後、藤原俊成(しゅんぜい)が「千載集」を出したが、その中に、小倉百人一首にも選ばれている次の和歌がある。「難波江の葦のかりねの一よゆゑみおつくしてや恋ひわたるべき」。難波の入江に生えた葦の刈根(仮寝)の一節(ひとよ＝一夜)のように、ほんの短い旅のさなか一夜を共にしたことで、これからずっと身を尽くし(みおつくし＝濡標)て、貴方を恋い続けるのでしょうか。括弧内は掛詞(かけことば)、葦・仮根・一節・濡標・渡るが全て難波江の縁語(えんご)である。作者は皇嘉門院別当。本名は薔子(しょうこ)、若年の和歌名は小大進(こだいじん)という。

技巧を凝らし女の恋心を言の葉で覆ったこの秀歌が本書の全てを体現している。平安後期の才媛はまた豊かな人間性と繊細な感性を併せ持つ絶世の美人でもあった。小説の終わり近くになってヒロインの叔母にあたる待賢門院堀河はいう、「あの光に盲(くら)み、心動かさぬ殿御はおるまい」。しかしこの小説は意外にも、男の視点で主人公小大進を捉えず、同じ貴族社会にいる同性の眼を通して描ききろうとしている。女の童の桔梗、従妹の治部卿、幼馴染の待賢門院加賀、そして堀河、さらにはその堀河に注進におよぶ若水、小侍従などである。筆者はそれを、男性である作者が、叙述に一定の距離を保つためにとった手段とみる。そうならばまさに成功している。読み進むうちに、思慕、尊敬、憧憬、嫉妬、対抗心、女同士のそれらが粘性の度を増し、身に絡み、身動き出来なくなっていく様が、美しく、浅ましく、哀しく迫ってくるからである。男の視点であれば、地の文の文体が変わり、この味は決して生まれなかったに違いない。

現代ではほとんど見られない衣装、装飾品、用具、建築物の名称だけでも煌びやかな中で、小大進の美しさと清らかさを讃える詞が、女たちの口から無尽蔵かと思われるほど出てくる。作者は、考えうるあらゆる修辞を駆使し、繰り返す漣のように読者の心に迫ってくる。どうです、あなたも小大進に逢って、薄幸な美姫(びき)をその胸に抱き、心ゆくまで泣かせてあげたいでしょう、と。心憎いほどの筆致である。さらに、小大進の容色は平安貴族の権力闘争にも少しく影響をあたえていくが、それが和歌を媒体として進んでいく点が特異であり、諸所にちりばめられた相聞歌が、ドロドロした貴族社会の実相を和らげて伝えている。この小説の主題の一は、小大進の次の台詞に集約されていると思う。「男と女はどうしてこうも違い、愛憎の狭間で苦しまねばならないのでしょうか」

本書は、平安時代に隔たる読者のために文中ルビを多用し、さらに人物、官職名、当時の行事・物品・衣装などについては括弧内に注釈を加えている。読書スピードと理解を阻害すまいという作者の配慮が何とも嬉しいかぎりである。

(馬場駿)